

Title	法学研究第四十一巻(昭和四十三年自一号至十二号)総目次
Sub Title	
Author	
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1968
Jtitle	法學研究：法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.41, No.12 (1968. 12)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19681215-0128

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

法学研究 第四十一卷 (昭和四十三年) 総目次

論説

	号数	頁	通頁	執筆者
婚約、内縁及び婚姻について……………	一	一	一	小池隆一
西ドイツにおける法定夫婦財産制の問題点……………	一	二五	二五	人見康子
——その機能的変遷の系譜を中心として——				
ラテン・アメリカにおける法の起源に関する一試論……………	一	五二	五二	賀川俊彦
——イスパニア法の系譜とその展開——				
農地法の目的……………	二	五	一三三	宮崎俊行
少年拘禁の種類……………	二	三六	一六四	宮沢浩一
西ドイツ新株式法における株主保護……………	二	五八	一八六	阪井光男
——単独企業を中心として——				
会社設立行為の法律構成……………	三	一	二八一	高島正夫
原爆被爆とその後の社会生活……………	三	一一三	三〇三	米山桂三
——地区事例調査による比較考察——				
不法行為における「顕著な関係」の理論の発展……………	四	一	四四一	平原隆弘
中世イングランドの「下院の弾劾裁判」(Impeachment)の起原……………	四	二六	四六六	森岡敬一郎
——一三二六年の Parliament に於ける Impeachment を中心として——				

人種と社会.....五 一七 五九七 米山桂三

英米における行政法の発展とその問題点.....五 四七 六二七 藤原守胤

民主社会党の成立.....五 九七 六七七 中村菊男

小村外交批判.....五 一二三 七〇三 内山正熊

世論過程についての一考察.....五 一五一 七三一 生田正輝

——世論の量と質との関連について——

政党と憲法問題.....五 一七一 七五一 大山正武

——反体制政党を中心として——

近代ドイツにおけるローマン的保守主義.....五 一九三 七七三 多田真鋤

新しいラディカリズム、あるいはイデオロギーの復活？.....五 二一五 七九五 奈良和重

中国と東南アジア諸国〔ウエトナム、ラオス、ビルマ〕の国境問題.....五 二三七 八一七 松本三郎

北朝鮮の外交政策.....五 二六七 八四七 池井優

女性犯罪と刑の量定(一).....六 一 八七三 中谷瑾子

——とくに女性殺人犯に対する量刑の実証的研究——

日本における国民的統合の一考察.....六 三〇 九〇二 鶴木真

——コミュニケーション・アプローチによる試み——

世論調査の限界について.....七 一 九九五 生田正輝

——世論調査の方法についての分析にもとづいて——

明治社会主義意識の形成.....七 二六 一〇二〇 中村勝範

ラートブルフの刑法論(一).....八 一 一一六一 宮沢浩一

孫文独裁下における汪精衛の役割.....八 三四 一一九四 山田辰雄

——一九二四年一月—一九二五年三月——

國連新加盟國家の若干問題……………九 一 一二八五 内山正熊

ラートブルフの刑法論(一・完)……………九 二八 一三一二 宮沢浩一

Der Einfluss des Bonner Grundgesetzes auf das deutsche Verwaltungsrecht……………九 卷末一 一四五〇 Prof. Dr. C.H. Uie

二・二六事件と昭和維新……………十 一 一四五三 中村菊男

女性犯罪と刑の量定(一)……………十 二五 一四七七 中谷瑾子

——とくに女性殺人犯に対する量刑の実証的研究——

Umfang und Grenzen der deutschen Verfassungsgerichtsbarkeit……………十 卷末一 一六二四 Prof. Dr. C.H. Uie

人事行政——英・米を中心とする——……………十一 一 一六二七 藤原守胤

事物の本性論の批判的立場……………十一 四二 一六六八 原秀男

——戦後西ドイツにおける事物の本性論の一方——

Die neuere Entwicklung des allgemeinen Verwaltungsrechts in Deutschland……………十一 卷末一 一七七〇 Prof. Dr. C.H. Uie

オーストラリア憲法における「充分な信頼と信用」条項……………十二 一 一七七三 平良

ドイツにおける不動産附合法の生成……………十二 一五 一七八七 新田敏

——土地・建物を中心として——

資料

井上毅の拷問廃止意見とボアソナードの井上宛書簡……………一 七九 七九 手塚豊

——統統・明治法制史料雑纂(八)——

司法省御雇外人アツペールの司法省法学学校卒業式演説……………二 九九 二二七 手塚豊

——統統・明治法制史料雑纂(九)——

司法省御雇外人ヒルとその建白書……………三 八九 三六九 手塚 豊

—— 続統・明治法制史料雑纂(一一・完) ——

司法省御雇外人ブスケの法学校に関する建議……………四 六二 五〇二 手塚 豊

—— 続統・明治法制史料雑纂(一一・完) ——

法哲学・社会学国際学会世界会議報告……………六 五〇 九二二 峯村光郎

オーストリア刑法雑誌論文目録……………七 四五 一〇三九 宮沢浩一

民事慣例類集の編輯とその編者達……………七 六三 一〇五七 利光三津夫

日米外交関係年表……………七 九六 一〇九〇 加藤冬作

—— 日米外交官歴任表 ——

民事慣例類集の編輯とその編者達(二・完)……………八 六三 一二二三 利光三津夫

明治末期の神社整理……………九 五六 一三四〇 米地 実

—— 長野県における通牒等を中心として ——

「国際機構論」関係英文文献目録……………十 六二 一五一四 松本三郎

ホップ契約栽培の一事例……………十一 五五 一六八一 宮崎俊子

オーストリア刑事法学の一断面……………十二 五一 一八二三 宮沢浩一

判例研究

〔商法〕 六八 合資会社に対して債権を有する無限責任社員が退社した場合に他の無限責任社員は右会社債務につき商法第八〇条による責任を負うか……………一 九〇 九〇 松岡和生

〔労働法〕 四四 全日本空輸株式会社事件……………一 九五 九五 社会法研究会

〔最高裁判事例研究〕 五〇……………一 一〇〇 一〇〇 民事訴訟法研究会

〔最高裁判事例研究〕 一六	一	一一三	刑事訴訟法研究会
〔商法〕 六九 東京都の隣接区内における同一商号の使用と不正競争の目的	二	一一六	岸田貞夫
〔労働法〕 四五 山陽放送仮処分申請事件	二	二二一	社会法研究会
〔最高裁判事例研究〕 五一	二	二二五	民事訴訟法研究会
〔最高裁判事例研究〕 一	二	一三〇	刑事訴訟法研究会
〔商法〕 〇 融通手形において融通者たる手形債務者が被融通者に対して有する特約をもつて所持人に対抗しうるか	三	一〇六	米津昭子
〔労働法〕 四六 国鉄・動力車労組事件	三	一一〇	社会法研究会
〔最高裁判事例研究〕 五二	三	一一五	民事訴訟法研究会
〔最高裁判事例研究〕 一八	三	一三一	刑事訴訟法研究会
〔商法〕 七一 拒絶証書作成期間内に呈示すみの約束手形の裏書譲渡を受けた所持人の遡求権	四	七〇	商法研究会
〔刑法〕 一一 いわゆる「信頼の原則」(Vertrauensgrundsatz) に関する最高裁判例二件	四	七四	中谷瑾子 大矢勝美 前岡宏和
〔労働法〕 四七 春風堂地位保全仮処分事件	四	八八	社会法研究会
〔最高裁判事例研究〕 五三	四	九三	民事訴訟法研究会
〔最高裁判事例研究〕 一九	四	一一一	刑事訴訟法研究会
〔商法〕 二 先日付小切手の日付前には呈示しない旨の特約の効力	六	六一	商法研究会
〔労働法〕 四八 日本光学労働組合事件	六	六五	社会法研究会
〔最高裁判事例研究〕 五四	六	七〇	民事訴訟法研究会
〔最高裁判事例研究〕 二〇	六	八三	刑事訴訟法研究会
〔商法〕 七三 商人である主債務者の委託を受けて保証人になつた非商人が保証債務の弁済によつて取得する求償権は商事債権か	七	一〇一	商法研究会

〔労働法〕 四九 小倉電話局職員退職金請求事件	七	一一〇	一一〇四	社会法研究会
〔最高裁判事例研究〕 五五	七	一一五	一一〇九	民事訴訟法研究会
〔最高裁判事例研究〕 二一	七	一三〇	一一二四	刑事訴訟法研究会
〔商法〕 七四 振出日の記載を欠く確定日払約束手形の効力	八	八三	一二四三	商法研究会
〔労働法〕 五〇 日本通信機事件	八	八八	一二四八	社会法研究会
〔最高裁判事例研究〕 五六	八	九二	一二五二	民事訴訟法研究会
〔最高裁判事例研究〕 二二	八	一〇六	一二六六	刑事訴訟法研究会
〔商法〕 七五 株式の引受について名義を貸した者の責任	九	九五	一三七九	商法研究会
〔労働法〕 五一 花園病院事件	九	九九	一三八三	社会法研究会
〔最高裁判事例研究〕 五七	九	一〇四	一三八八	民事訴訟法研究会
〔最高裁判事例研究〕 二三	九	一一七	一四〇一	刑事訴訟法研究会
〔商法〕 七六 名義書換未了株主の株主としての取扱及び議決権代理人資格制限をなした定款の効力	十	九四	一五四六	商法研究会
〔労働法〕 五二 医療法人新光会事件	十	一〇一	一五五三	社会法研究会
〔最高裁判事例研究〕 五八	十	一〇六	一五五八	民事訴訟法研究会
〔最高裁判事例研究〕 二四	十	一二〇	一五七二	刑事訴訟法研究会
〔商法〕 七七 約束手形の裏書人のなした相殺を振出人が援用できるか	十一	六三	一六八九	商法研究会
〔刑法〕 一二 刑法第二六条第三号による執行猶予の取消ができないとされた事例	十一	六八	一六九四	青柳文雄 筑圃正泰
〔労働法〕 五三 東京12チャンネル解雇事件	十一	七四	一七〇〇	社会法研究会
〔最高裁判事例研究〕 五九	十一	七九	一七〇五	民事訴訟法研究会
〔最高裁判事例研究〕 二五	十一	九四	一七二〇	刑事訴訟法研究会

〔商法〕 七八 手形の原因債権を自働債権とする相殺と手形の交付の要否……………	十二	八三	一八五五	商法研究会
〔労働法〕 五四 日本電気株式会社事件……………	十二	八九	一八六一	社会法研究会
〔最高裁判事例研究〕 六〇……………	十二	九四	一八六六	民事訴訟法研究会
〔最高裁判事例研究〕 二六……………	十二	一〇九	一八八一	刑事訴訟法研究会

紹介と批評

I・ハウ著『辛抱強い仕事』……………	一	一一八	一一八	奈良和重
——民主主義的ラディカリズムの政治論集（一九五三—六六年）——				
A・T・ステイル著『アメリカ国民と中国』……………	一	一二二	一二二	池井優
有賀弘著『宗教改革とドイツ政治思想』……………	二	一三九	二六七	鷲見誠一
中村菊男著『天皇制ファシズム論』……………	二	一四四	二七二	角田順
西原春夫著『刑事法研究』……………	三	一四〇	四二〇	宮沢浩一
大山梓著『旧条約下に於ける開市開港の研究』……………	三	一四八	四二八	池井優
——日本に於ける外国人居留地——				
フアゲン著『政治とコミュニケーション』……………	三	一五一	四三一	鶴木真
E・P・マイケヴィッツ著『ソ連共産党の政治教育組織』……………	四	一二〇	五六〇	中沢精次郎
J・エリユール著（K・ケレン記）『政治的イリュージョン』……………	四	一二三	五六三	奈良和重
R・E・ジョーンズ著『政治の機能分析』……………	四	一二八	五六八	内山秀夫
E・O・ライシャワー著『ヴェトナムを越えて』……………	六	九三	九六五	松本三郎
曹汝霖著『一生之回憶』……………	六	一〇四	九七六	池井優

利光三津夫著『律令制とその周辺』……………六 一〇八 九八〇 中 沢 巷 一

宮沢浩一編『世界諸邦少年法制の動向』……………六 一一四 九八六 大 中 山 研 一

E・J・ヘヴィ著『竜の抱擁——中共とアフリカ——』……………七 一三九 一一三三 小 田 英 郎

新明正道著『社会学的機能主義』……………七 一四四 一一三八 川 合 隆 男

英国国際法比較法研究所刊『宇宙法の現今諸問題——シンポジウム』……………七 一五一 一一四五 粟 林 忠 男

慶應義塾大学地域研究グループ著『変動期における軍部と軍隊』……………七 一五九 一一五三 神 川 信 彦

H・アブシーカー編『マルクス主義と疎外論』……………八 一一二 一二七二 奈 良 和 重

B・ルイス、C・ペラ、J・シャハト編『アラブ諸国とイスラム諸国の憲法』……………八 一一五 一二七五 遠 峰 四 郎

C・エイタ著『政治統合の理論』……………八 一一八 一二七八 鶴 木 真

S・M・リップセット、アルド・ソラリ共編『ラテン・アメリカにおける指導者層』……………九 一二二 一四〇六 賀 川 俊 彦

アーモンド、パウエル共著『比較政治学——発展的アプローチ』……………九 一二六 一四一〇 堀 江 湛

山川雄巳著『政治体系理論』……………九 一三三 一四一七 内 山 秀 夫

P・ゲイ著『啓蒙主義・ひとつの解釈』……………十 一二六 一五七八 奈 良 和 重

——近代的異教の抬頭——

生田正輝著『マス・コミュニケーションの研究』……………十 一三〇 一五八二 鶴 木 真

D・E・アプター著、内山秀夫訳『近代化の政治学』上・下……………十 一三三 一五八五 上 林 良 一

シャルロ著『新共和国連合』……………十一 九九 一七二五 猪 内 山 正 徳

B・T・ウイルキンス著『パークの政治哲学の問題』……………十一 一〇七 一七三三 奈 良 和 重

G・W・チアブマン著『エドマンド・パーク』——実践的想像力——……………十一 一一〇 一七三六 平 松 茂 雄

石川忠雄著『国際政治と中共』……………十一 一一五 一八八七 多 田 真 鋤

F・マイネツケ著『世界市民主義と国民国家I』……………十二 一一五 一八八七 多 田 真 鋤

——ドイツ国民国家発生の研究——

R・ウォルフ他著『純粹寛容批判』	十二	一一八	一八九〇	奈良和重
B・R・エプスタイン、A・フォルスター著『過激な右翼』	十二	一二二	一八九四	太田俊太郎
——ジョン・バーチ・ソサエティとその同盟者に関する報告——				

特別記事

正田彬氏学位請求論文審査要旨	四	一三五	五七五	
政治学科開設七十周年に際して	五	一一	五九一	潮田江次
政治学科七十年の歩み	五	二八三	八六三	(奈良・池井)